

2012 – 2013

# 東日本大震災被災地支援活動

—静岡県災害ボランティア活動記録—



## はじめに

大きな悲しみをもたらした東日本大震災より2年が経過しました。もう2年、まだ2年…、この時間の受け止め方は人それぞれだと思いますが、現地への関わりを続けて思うのは復興への道のりはまだまだこれからだということです。そして、時間の経過とともに消える痛みもあれば、消えない痛みもあることを痛感しています。私たちはこの痛みにどれだけ寄り添えているでしょうか。

本協会は、岩手県遠野市を拠点に活動する「遠野被災地支援ボランティアネットワーク“遠野まごころネット”」を後方支援するスタンスで、遠野まごころネットとの連携を基本に支援活動を行ってきました。そして、静岡をはじめ遠方から出かけるボランティアの活動拠点としてきた「岩手県遠野災害ボランティア支援センター（愛称：遠野まごころ寮）」は所期の目的を果たし、3月9日に閉所しました。日本財団のご支援のもと、平成23年4月8日に開所して以来、まごころ寮には3,541名が寝泊まりし活動に参加してきました。震災直後の1年間は個人宅の泥出しやガレキの撤去、土砂のかき出し、家屋の片付けなどを中心に行い、2年目に入ると畑づくりの応援や花壇づくりなどの活動も加わりました。また仮設住宅に暮らす人々を応援するために、仮設住宅応援ボランティアが活動し、居場所づくり・つながりづくりを目的とした“しづおか足湯隊”が、たくさんのつぶやき（声）を聞いてきました。

ボランティアは“命に寄り添う”活動です。自主自発的な活動であり、よりよい社会を目指す活動です。そしてボランティアの関わりが様々な関係性をつくり、大きな希望につながるものであると信じています。「震災を忘れないで」と震災の風化を心配する声も聞こえます。震災から2年、私たちが見聞きしたこと、聞いた声を消すことなく、小さな希望であっても灯していくらと思っています。

そして、いつ起きてもおかしくないといわれる東海地震等に備え、現地支援とともに私たちの足元を見つめ、これからも活動していきたいと思います。

最後に、多くの方のご支援により今まで活動が続けられていることに心より感謝申し上げます。また2年にわたり「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」としてご支援をいただけましたことに、厚くお礼申し上げます。

ありがとうございました。

平成25年3月31日  
特定非営利活動法人静岡県ボランティア協会  
理事長 神田 均

# －東日本大震災被災地支援活動の記録－

## もくじ

■はじめに	1
特定非営利活動法人静岡県ボランティア協会 理事長 神田均	
■静岡県ボランティア協会の取り組み	
第1章 平成24年度活動記録 3	
(1) 静岡県災害ボランティアの派遣	
①復興支援ボランティア	
②仮設住宅応援ボランティア	
③「高校生ボランティア派遣計画」	
④しづおかつながり隊の派遣	
(2) 癒しと潤いの持てる郷をつくろうー花桃の植栽ー	
(3) 仮設住宅の被災者に静岡の“みかん”を贈る運動	
(4) 遠野災害ボランティア支援センター「遠野まごころ寮」 閉所	
第2章 ボランティアの声ー参加者アンケートより 17	
第3章 東海地震等に備えて 23	
ーボランティアの力を活かして地域の復旧・復興を進めるー	
(1) 東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会	
(2) 被災地支援活動と「受援力」	
(3) 図上訓練を通じた「連携・つながり」	
■資料編 27	
1. 静岡県災害ボランティア派遣 実績報告	
2. 静岡県災害ボランティア派遣 関連資料	

## 第1章

### 平成24年度活動記録

大きな悲しみをもたらした東日本大震災より2年が経過しました。この2年、本協会では被災地に暮らす方々に少しでも穏やかな生活が戻ることを願い、現地に赴き活動するボランティアや自分が暮らす地域で活動するボランティアらとともに活動を続けてきました。

そしてこの間、被災地支援だけでなく、私たちの暮らす社会の課題解決に向けて取り組むボランティアにも出会ってきました。そこには地域のつながりを深める、生きづらさを抱える子どもたちに向き合う、災害に強いまちづくりを目指すなど、困難を抱える人に寄り添い、奮闘するボランティアがいました。

そこで2年にわたる被災地支援活動の取り組みを振りかえります。

## (1) 静岡県災害ボランティアの派遣

### ①復興支援ボランティア

震災から1年が経過し、現地の活動ニーズの変化が見られるようになった。そこで、ボランティアバスの派遣を月1~2回のペースで実施し、4月から12月までに13回、351名が参加する。なお活動は、遠野まごころネットおよびNPO三陸産業復興支援 ASSIST SANRIKUと連携、調整による活動を行った。



活動先：釜石市・大槌町

活動内容：宅地跡の清掃・細かながれきやガラス片の撤去／仮設住宅裏斜面で花壇づくりのための整地／シケで港に打ち上げられた流木や木くずなどの撤去・清掃／イベントの準備・参加・片付け／花壇の草取り・堆肥づくり／ブルーベリー植樹のための畑の整地／公園づくりのための草取り作業／遠野まごころネット主催「サンタが100人やってきた！」参加

なお、バス派遣にあたり、中央共同募金会の「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」に助成申請したところ、第7期・第8期の助成配分が決定し、バス代の一部を負担いただくことができた。

### ②仮設住宅応援ボランティア

平成24年3月より、足湯を中心とした仮設住宅応援ボランティアの活動をはじめ、36隊派遣、161名が参加した。遠野市内や釜石市内の仮設住宅および見なし仮設住宅での足湯を通じた居場所づくりやお茶っこ活動、ならびにサポートセンターボランティアとして子どもの遊び相手や行事の手伝いなどを行った。



活動先：遠野市内仮設住宅（1カ所）

見なし仮設住宅（1カ所）

釜石市内仮設住宅（21カ所）

(ボランティア情報静岡 2012.7.8月合併号特集より)

そばにいるだけで…

～東日本大震災 仮設住宅応援ボランティアの活動より～

### ■しづおか足湯隊の派遣

“しづおか足湯隊”として毎週6名ほどの仮設住宅応援ボランティアが、遠野市内と釜石市内の約15か所の仮設住宅や見なし仮設住宅で足湯活動を通じたつながりづくり、居場所づくりなどの活動をしています。

「足湯」は湯に足をつけ、心身ともにリラックスしてもらう活動です。足湯ボランティアには、一対一でお話を聞くことで「心のケア」につながったり、人が集まる「コミュニティづくり」の場を生み出す効果があります。

仮設住宅での生活を余儀なくされ、多くの人が住みなれた地域を離れました。仮設住宅には、隣に暮らす人は別の地域から来た知らない人ばかりと家を出ずに日々を過ごされる年配の方もいれば、小さな子どもの声が漏れ迷惑をかけてしまうのではないか、と周囲を気にしながら生活しているお母さんもいらっしゃいます。

### ■つぶやきに耳を傾ける

足湯を通して被災された方々が発する言葉を、「つぶやき」と呼んでいます。活動を通して、私たちはいろいろなつぶやきを聞いてきました。

「大事なもん全部流された…気持ちもね。気持ちの区切りができるないねえ…。」

(70代・女性)

「ボランティアさん来てくれて本当感謝してるよ。泣いてばかりもいられないからさ… 地震あったらなんも持たずにしてんのに逃げてな。」(60代・女性)

「足湯をすると夜よく眠れる。手足の先が温かくなるからいいんだよ。」(60代・男性)

「ワカメ、カキなどの養殖をおこなっていたのが全部流された。昨年11月カキの種付けを行った。今年は、ワカメがとれそう。」(70代・男性)

### ■そばにいるだけで…

仮設住宅応援ボランティアは、被災された方に直接向き合い活動をします。仮の住まいを確保しても、震災によって、日常の生活が奪われ、厳しい避難生活を強いられていることに変わりありません。その方々が心のうちに抱えるものは私たちに計り知ることはできません。足湯を提供することで、少しでもホッとしてもらい、のんびりしてもらうことはできると思います。その中で心の内を少しでも話してもらい、心を軽くしてもらえればと活動を続けています。何かをしようと思いつまなくても、“ただ、そばにいる”ことがとても大切なだと感じています。

今特集では、ボラティアとして参加された方の体験から感じた声を紹介します。

被災された方々が孤独にならないよう、忘れ去られることがないよう、引き続き支援活動をすすめていきますので、これからもどうぞ復興への歩みを、共に見守り、支えてください。

仮設住宅で生活されている方々の、現状や震災当時の状況を直に耳にすることができて、改めて、震災による被害は決して物理的なものだけではなく、心の中に深く爪痕を残していると、改めて実感しました。 (K・男性)

話を聞くことの大切さ、難しさを、また、人とふれあう事の大切さを改めて知った。その人の想いを受けながら、聞くときはどう返事をしたらよいのか? 反応したらよいのか? 何度も悩む場面があった。手をもんだり、さするのも「これだけで安心する」と言ってくださった方が何人もいた。仮設住宅での孤独感を感じた。

(S・女性)



仮設に入って住む場所を確保しても、人間関係の希薄化、雇用の問題、孤立といった様々な問題を抱えていることが分かりました。

(Y・男性)

## 仮設住宅 応援ボランティア の 声

今後、岩手の方と、ボランティアとともに力を合わせてよりよい社会をつくっていけたらいいと思いました。そして、いつかボランティアがいなくても自治会が動いて、問題を解決できるようなまちがたくさん増えていくことを願っています。 (D・女性)



仮設応援ボランティアは、地味な活動。被災者の方が自ら動きだしていくタイミングを待つ時間が必要。動きだそうーと思われた時、「近くに私たち・・・いますよ！」とさりげなく知らせていくことも必要。人と人が信頼関係を樹立していくには、「また来てくれたの！」ということも大切。

(M・女性)

初日、2日目とボランティアに来たからには何かしなくちゃという思いが強くありました。何かするというより「そこにいて、出来ること、必要とされていることをする」ことが大切だと気付きました。 (N・女性)

足湯やお茶っこ中に笑顔を見せてくれる方が多くいましたが、時々、震災で亡くなられた方の話や今後の不安などを話され、聞くことしかできませんでした。今後の不安もある中で、足湯やお茶っこが、少しでも笑顔になれ、フツッと力が抜ける時間になつたらいいなと感じました。 (N・女性)

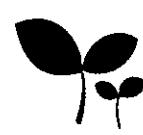
参加してみて、小さな力も大きな力になる、また継続することの大切さを痛感した。精神的サポートは大変だが、必要なこと。今後も災害を忘れることなく、私自身も活動を継続していきたい。 (S・女性)



手を触れあっての足湯は、ゆったりとした雰囲気づくりに適した活動でした。初めてこの活動に参加しましたが、次第に互いがうちとけ合い、楽しい時間が過ごせました。 (H・女性)



被災された方々の心に残る傷や現在抱える苦悩を直に聞いたり感じ取ったりしました。ただただ“そこにいる”ことしかできないけれど、同じ刻を同じ空間で共に過ごすことでたとえ一瞬でも苦悩や寂しさを忘れる時間になつたらいいなあ、と思いました。 (A・女性)



## ■ボランティア派遣（4月～12月／バス派遣）の流れ

### 1. 事前準備

募集要項の作成。  
ホームページに要項掲載、及び報道機関を通じ参加者募集

申込み受付

申込者の調整・参加決定

参加者へ電話にて連絡→参加案内の発送

#### 【参加案内】

- ・日程のご案内
- ・誓約書・健康チェックシート
- ・破傷風予防リーフレット

参加者名簿作成

○受入れ団体（遠野まごころネット）へ連絡

○宿泊拠点（遠野まごころ寮）へ連絡

災害派遣等従事車両証明の申請

### 2. 出発日

バス調整にあたる打合せ（旅行代理店・バス会社）

#### 【オリエンテーション】

○受付確認

- ・旅費受取り
- ・ボランティア保険加入確認
- ・誓約書・健康チェックシート提出（確認）
- ・食事注文受付

○オリエンテーション

- ・実施内容の確認（目的・活動内容など）
- ・活動にあたっての心構え  
「東日本大震災 災害ボランティア活動に初めて参加される方へ」
- ・グループごと顔合わせ（自己紹介）

○乗車確認

#### 【配布物】

- ・オリエンテーション資料（しおり）
- ・ビブス

### 3. 現地での活動

- ・毎夕、ミーティング（ふりかえり）
- ・遠野語り部「いろいろ火の会」さんより遠野の昔話をお話いただく

### 4. 活動終了後

アンケート回収、集計

活動報告のまとめ（関係者共有）

## ■ボランティア派遣（仮設応援ボランティア）の流れ

### 1. 事前準備

募集要項の作成。  
ホームページに要項掲載、及び報道機関を通じ参加者募集

↓  
申込み受付  
申込者の調整・参加決定  
参加者へ電話にて連絡  
→説明会・オリエンテーションの案内

### 2. 説明会・オリエンテーションの開催

#### 【説明会】

はじめての参加者を対象に、仮設住宅応援ボランティアの目的・活動内容を説明し、不安なく参加してもらうために実施する。

説明会の後、参加の意思確認をし、オリエンテーションに参加いただく。

#### 【オリエンテーション】

○目的・活動内容の確認

○ボランティア保険加入説明

○参加者の顔合わせ（自己紹介）

○活動にあたっての心構え

「東日本大震災 災害ボランティア活動に初めて参加される方へ」

（JCN 作成資料（改訂）・日本財団 ROAD プロジェクト足湯資料 参照）

○誓約書・健康チェックシート提出（確認）

○旅費助成の説明・手続き

↓  
参加者名簿作成  
○宿泊拠点（遠野まごころ寮）・足湯コーディネーターへ連絡、  
日本財団 ROAD プロジェクト及び仮設住宅生活支援員との活動先調整  
高速バス手配（旅行代理店）

### 3. 現地での活動

・毎夕、ミーティング（ふりかえり）

足湯を通して聞いたつぶやきの整理、参加者間の気持ちの整理

### 4. 活動終了後

活動記録・アンケート回収、集計  
活動報告のまとめ（関係者共有）

### ③「高校生ボランティア派遣計画」

「高校生にもできることはないだろうか」との声を受け、夏休みを利用し、高校生の災害ボランティアを派遣した。実際に現地を訪れ、活動し、震災やボランティアについて考える機会とすることを目的とする。あわせて、静岡に戻った高校生が学校や地域を巻き込みながら、被災地支援に取り組んでもらうことを願い実施した。

募集期間 6月25日（月）～7月17日（火）必着

事前研修会 8月2日（木）

現地研修 8月5日（日）～8月9日（木）

ふりかえりの会 8月18日（土）

応募者 高校生 101名（男 44名・女 57名）

参加決定者 高校生 30名（男 21名・女 9名）

一般（大学生・教員・民生委員） 6名（男 4名 女 2名）

#### <現地研修（活動）>

日 程：8月5日（日）～8月9日（木）

訪問地：大槌町・陸前高田市

活動内容：・仮設住宅に暮らす方々との交流

・大槌公民館安渡分館館長よりお話「危機管理」

・大槌高校の生徒たちとともに「希望の灯りづくり」

・「和 RING-PROJECT プロジェクト」参加

・陸前高田市気仙町上長部地区での河川清掃活動

（ボランティア情報静岡 2012.9月号特集より）

今を生きる

—東日本大震災「高校生ボランティア派遣計画より」—



【2012年8月6日 大槌町：和一RINGPROJECTにて】

東日本大震災より1年5ヶ月が経過しようとする8月。30名の高校生、6名の大学生・教員・一般らが岩手県大槌町を訪ねました。

これは本協会が、高校生が実際に被災地に足を運び、ボランティア活動に参加し、地元の方々との交流を通して「ボランティア」「復興」「地域」

について学び、静岡に戻った彼らが学校や地域を巻き込みながら、被災地支援に取り組んでいくことを願い、実施しているプログラムです。

そこで今特集では、仮設住宅に暮らす方々と交流したり、地元の高校生とともに「希望の灯りづくり」や地元NPOが取り組む「和—プロジェクト」に参加した高校生たちの思いを紹介します。

### 生きる—大槌町公民館安渡分館にて

「自分の命を縮めるようなことはしてはいけない」— 大槌町公民館安渡分館の館長を務める関洋次さんは、仮設住宅に暮らす方々にこう話す。震災により大切な家族、家財、仕事、生きがいを失った人たちの中には、助かったけれど、その後自ら命を絶つ人もある。しかし、そのような死があってはならない、みんなで生きていくんだ、と言葉をかけ続ける。そのために、交流の場をつくり、生きがいづくりを行っている。

そして静岡から訪れた高校生たちに、「地震や津波がきたらどう助かるか」「家族や自分がどう行動するのか」「自分の命は自分で守ること」など危機管理につながるお話をしていた。そして機会を得、この場にいられることに感謝し、静岡に帰ったら防災リーダーになってほしいと続けられた。

### 一步を歩みだすために—「和」R I N G P R O J E C T

地元の若者たちが取り組む「和」R I N G P R O J E C Tにも参加した。このプロジェクトが始まったきっかけは、家族の戻らない仲間の一人が「洋服の一部でもあれば、身につけ共に生きていけるのに…」と心の内をつぶやいたことだという。「今まであった場所と物で、何かを作り出そう」と津波で流されたガレキを使用してストラップづくりを始めた。ガレキ集めから、削り出しなどの加工を全て手作業で、ひとつ一つ心をこめて作業をしている。

大切な家族や友人を亡くした人が立ち上がるとしても簡単に立ち直ることは難しい。生きる目標や家族、財産、仕事、地域を失った喪失感は人によって計り知れない。避難所で生活していても何をしてよいのか分からない若者たち。いつまでも途方に暮れ、生きていく目標を見いだせない人たちが日々の暮らしをどうすごしていくのか。心の支えづくりやもう一度生きていくための心にエネルギーを充電していく場所が必要だった。和—R I N G P R O J E C Tは、

#### ■大槌町安渡地区

岩手県大槌町は釜石市の北に位置する人口13,117人（平成24年8月31日現在）の町。三陸沿岸に位置し、大槌湾にはNHK人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルになった蓬莱島がある。

大槌町の中心部を含め、安渡地区も大津波がおそい、壊滅的な被害を受けた。海岸近くにあった公民館や保育園も津波で跡形もなく流された。そして、現在は避難所にもなった元安渡小学校の校舎1階を大槌公民館安渡分館、そして安渡保育園も仮の分館や園舎として利用している。校庭には仮設住宅が建ち、肩を寄せ合って地域の人々が暮らしている。

ゆっくりとした時間を使い、生きる居場所になっている。

#### ○高校生の声○

家の柱やタンスなどの木をストラップにして「忘れない」っていう強い思いがすごく伝わった。みんな、明るく楽しい人たちだった。しかし、周辺の津波の傷痕は痛々しかった。(佐野睦実(富士東高校))

家族の温かさにも触れましたが、どんなに小さなことでも一歩ずつ前にすすもうという仕事から伝わる思いがありました。(濱田綾人(静岡北高校))

#### 今だから語れる—大槌高校の生徒さんとの「希望の灯りづくり」

「今、一番必要な物って何？」

「うーん…特にないけど…強いて言うなら家、かな。」

大槌高校のみなさんとの交流は静岡の高校生にとって、同世代の被災体験を聞く機会にもなった。

津波から必死で逃げた時のこと、避難所生活の苦労、仮設住宅の不便さ、犠牲になった人のこと…。10代の女の子が淡々と話してくれる現実は、これまで被災した方の気持ちを想像するしかなかった私たちに染み込んだ。

「こういう事を、聞いていいのかなって…。」

「まあ、でも聞いてくれたら、話すし。」

震災の経験を、一部笑い話にもして話してくれた大槌高校の皆さん。灯籠のメッセージには堂々とした筆致で、“今を全力で生きる!!”と書いてくれた。

「希望の灯り」は、一人でも多くの意見を聴くことができるよう、メッセージ入りの灯籠を作成し、心の声を聴く目的とともに、灯籠の灯りで被災をして電気が消えてしまった町の中と暗くなりがちな心を優しく照らし、復興に向けて一步をすすめられるようにと願いが込められている。

#### ○高校生の声○

「幼稚園の頃からの友達をなくした」「お年寄りの方を助けられなかつた」「お風呂に何日も入れなかつた」など、リアルな話をたくさん聞きました。涙が止まりませんでした。メディアでは伝えられていない多くの体験を聞きました。

(村松奈菜(加藤学園高校))

同じ年の女の子たちと話し、一番心に響きました。家が流されたこと、家の下敷きになってしまって救助できるよう看板を立てたのを見るのが辛かったこと、友達が亡くなってしまったこと…。私たちが想像もつかないようなことが実際に起きたことが分かりました。町を歩いて、どれだけ津波が恐ろしいか本当に分かりました。(遠藤桃花(静岡サレジオ高校))

#### —災害に立ち向かう—

東日本大震災から私たちは何を学びとることができるでしょうか。

人の命はお金にはかえられません。大震災は起きると再認識し、いざ、災害が起きたときにどう災害に立ち向かうかを私たちは今しっかりと考え、対策することが大事です。

### ■参加者の声「活動を通して感じたこと・考えたこと」

この日思ったことは、とりあえず生きてなきゃどうにもならない!!ということ。私たち高校生にできることは本当に限られているし、むしろ全然ないけど、3.11のことを忘れず、みんなに伝えるということは実際行った私たちにしかできないことだし、するべきだと思う。現地の人も、震災のことを忘れてほしくない、とか、3年、5年、10年経って現地がどうなっているか見届けてほしい、とおっしゃっていたので、また訪れたいと思った。また、東海地震のときに同じことを後悔しないように、色々な角度から目配りできる人になりたいと思った。(長谷川友紀(浜松西高校))

人と人との助け合いながら生き、「今は幸せです」といえる人の強さに、とても感動しました。町を歩いているとかろうじて、すべて流されなかった建物がいくつかあり入らせてもらいましたが、言葉を失いました。テレビで見る光景とはかけ離れていて、高いところまで浸水したのが分かったし、避難所だからといって安心しきれないなと思いました。海から離れた家々にも被害があり丈夫である防波堤が崩れているのも見て自然災害に人間は勝てないことを改めて感じました。公民館や大槌高校の生徒と関わり「普段の訓練の大切さ」を再認識できよかったです。“つながり”がもてたことも嬉しかったです。

(中川優芽(富士宮北高校))

### ■参加者の声

#### 「地域の命を守るために」

同行者 東京学芸大学 井口 歩(清水区在住)

3月11日14時46分、私は東京湾から歩いてすぐのビルにいました。公共交通機関が止まり、その日は家に帰れませんでした。周囲の人がいなければその日寝る場所を確保することさえ難しかった私ですが3月11日までは恥ずかしいことに「防災意識の高い静岡県民なんだから地震が来ても私は大丈夫」と思っていました。昨年数回宮城県を訪れる機会があり、地元と同じような港町や海と山がとても近い場所を見、日頃の備えを聞く中で自分の危機意識の低さを知り、同時に東海地震が来ると言われる静岡県はこの震災から学ばなくてはいけないと強く思いました。しかし震災前の暮らしをできない人が沢山いる中で、自分の街の、起ころかも分からぬ震災への危機管理について語ることが良いことなのか、ずっとわからずいました。ですから、関さん(安渡公民館分館長)や東梅さん(大槌町「希望の灯りプロジェクト」実行委員長)が大槌と静岡の地形を比較しながらお話ししてくださいったり、「静岡で災害が起きた際にリーダーとなってほしい」とお話しされるのを聞いて、もっと静岡の人と防災について話して良いのだ、話さなくてはいけないと思いました。

私の家は海から1.5キロ、海拔8メートルのところにあります。3月11日までの自分の住む地域が海から近いという認識はありませんでした。隣にある母校の小中学校では地震が起きた際グランドに逃げて点呼をとり保護者の迎えを待つという避難訓練が毎年されていましたが、昨年から校舎の4階に避難することに変わったそうです。本来、子どもやお年寄りを助け率先してリーダーになるべき私のような世代が地元の防災意識の変化に対応できていませんというのは本当に危機的状況であると感じています。母校の同級生、先輩、後輩に自分たちの地域が津波とは無縁の場所では無いということを伝え、防災について話す機会をもちたいと思います。また、今回その土地に行かなくては津波というのがどれだけの威力をもつもののか実感が湧かないと感じました。週末など機会を見て友人たちと一緒に岩手県を訪れ自分たちの地域の防災を考えてみたいですし、それを通して岩手の復興を応援する仲間の輪を広げていけたら、と思います。

#### ④しづおかつながり隊の派遣

亡くなられた方々のご冥福を祈るとともに、この震災を忘れることなく、これからも地元に暮らす方々に思いを寄せ、つながっていくことを目的に、ボランティアバスを派遣した。またまごころ寮閉所に合わせ、閉所式へ出席する。

日 程：平成 25 年 3 月 8 日（金）21:00 発～12 日（火）6:30 着

活動内容：・遠野まごころ寮閉所式・感謝の集い 準備・参加・片付け参加

- ・花桃の郷づくり（釜石鶴住居）草取り作業
- ・（天候不良のため予定を変更し）地元の方に大槌町を案内いただき、旧大槌役場に設けられた慰靈台で黙とうをささげる
- ・遠野まごころ寮大掃除
- ・陸前高田市気仙町上長部地区にて 14:46 黙とう
- ・新生おおつち、ぐるっとおおつち、おらが大槌夢広場企画「3.11 集い～灯火～」参加
- ・遠野まごころネット主催「キャンドルナイト」参加

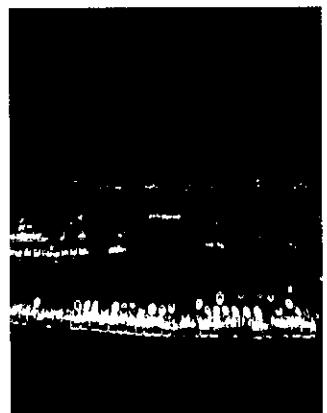
参加者数：55 名（事務局含む）



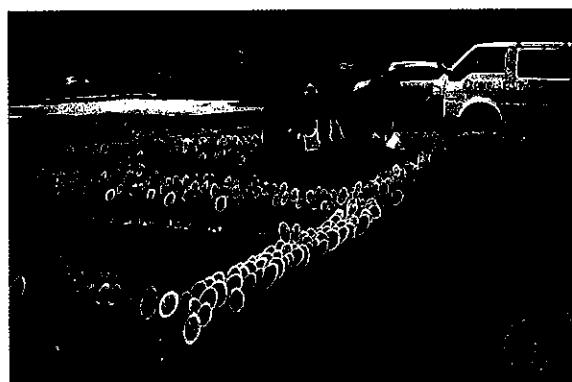
大槌役場前にて黙とう



陸前高田市上長部地区にて 14:46



キャンドルナイト



「3.11 集い～灯火～」準備参加

## (2) 癒しと潤いの持てる郷をつくろう－花桃の植栽－

本協会では、”ばらの都苑”さん（浜松市中区）のご提供を受けた”花桃”を、沿岸被災地に植栽し、復興の応援をする活動に取り組みました。

### ①第1回植栽会 in 遠野

震災以後、遠野市と静岡県は被災地支援のために協力し合ってきました。友好の証として、遠野市に150本を植栽した。

実施日：7月13日（金）

～15日（日）

植栽地：遠野市

・遠野運動公園

・たかむろ水光園

参加者：43名（事務局含む）



### ②第2回植栽会 in 釜石

花桃オーナーをはじめボランティアが参加し、甲子町のこすもす遊園に100本、鵜住居地区神之沢に300本の苗木を植栽。強い日差しの中、硬い土壌に悪戦苦闘しながら広場と川沿いの堤防への植栽となりました。

植栽の様子を見守ってくださった鵜住居地区神之沢の常楽寺の前住職は、「沢山の杉の木が津波で倒れたり塩害で枯れてしまい、この花桃が成長し花を咲かせてくれるのが今から楽しみだ」とお話しくださいました。



実施日：9月14日（金）～16日（日）

植栽地：釜石市こすもす遊園・鵜住居（常楽寺・神ノ沢）

参加者：49名（事務局含む）

### (3) 仮設住宅の被災者に静岡の“みかん”を贈る運動

仮設住宅で生活されている被災者の方々に、“静岡のみかん”をクリスマスプレゼントとしてお届けする取り組みを実施した。

協力者：42件

提供量：611箱

届け先：遠野市や釜石市内の仮設住宅に暮らす方々や釜石市・大槌町の幼稚園・保育園等



### (4) 遠野災害ボランティア支援センター「遠野まごころ寮」閉所

本協会では、日本財団ROADプロジェクトの一環として、日本財団・震災がつなぐ全国ネットワーク・東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会の三者合同で、岩手県遠野市にボランティアの拠点となる「岩手県遠野災害ボランティア支援センター（遠野まごころ寮）」を設置した。平成23年4月8日より2年間、遠野まごころ寮を活動拠点に、遠野被災地支援ボランティアネットワーク「遠野まごころネット」と連携し、支援活動を行う。また、独自の取り組みとして“しづおか足湯隊”的派遣、花桃の植栽などを行ってきた。

設置期間：平成23年4月8日～平成25年3月15日

利用者数：3,541名

#### 新しい公共の場づくりのためのモデル事業

東日本大震災の被災地の人々を支援するとともに、支援活動にかかる静岡県のボランティアが活動するにより、本県民の防災意識の高揚を図る機会とすることを願い、本事業を実施した。被災地へのボランティア派遣をするために、建設した「遠野まごころ寮」の施設の改修並びに管理棟の建設を実施した。静岡県より岩手県の被災地に継続してボランティアの派遣をしていくために、管理棟が建設され、活用された。

地震そして津波被害など大きな犠牲を払うことになった今回の震災の支援活動から私たちは何を学ぶことができるのか、問い合わせていきたい。

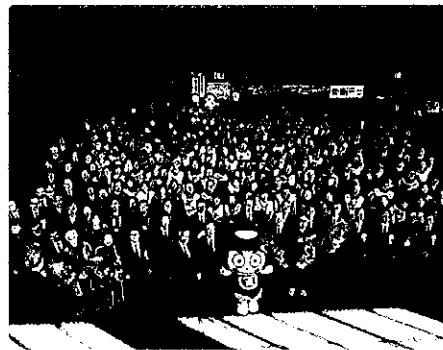
### <遠野まごころ寮閉所式>

遠野における 2 年間の役割を終え、3 月をもって活動拠点としてきてきた“遠野まごころ寮”は閉所を迎えることになった。そこで、遠野浄化センター内に共に敷地を構えた神奈川県「かながわ金太郎ハウス」とともに合同で閉所式を開催した。

閉所式にあたり、本寮設置にあたりご支援をいただいた日本財団より三浦監事様、静岡県森山副知事にご臨席をいただき、ボランティアらとともにこの 2 年の活動を振り返るとともに、受け入れをいただいた遠野市をはじめ地元町内会の皆様方に感謝を伝えた。

開催日：平成 25 年 3 月 9 日（土）

会 場：岩手県遠野市総合福祉センター



## 第2章 ボランティアの声 -参加者アンケートより

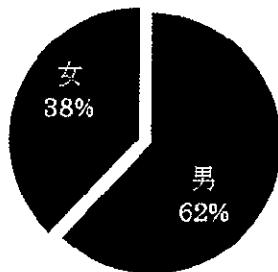
平成24年度、復興支援ボランティア・仮設住宅応援ボランティアに512名参加した。

参加者アンケートより、参加者の声を紹介する。

平成 24 年度、本協会のボランティア派遣は、ハード活動を主とした復興支援ボランティア、足湯やお茶っこを中心とした仮設住宅応援ボランティアを中心に行つた。静岡から大型バスを出し、30 名ほどの人数で活動する復興支援ボランティアは、23 年度は毎週派遣をしてきたが、現地ニーズの変化に伴い、月 1 回から 2 回の回数にした。これらに参加されたボランティアは 512 名にのぼる。

参加者の内訳など記す。

男女別の内訳を記す。

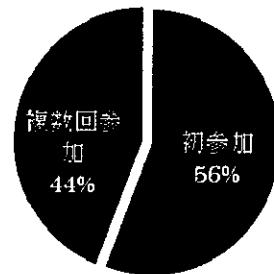


前年度は男性 71% (796 名)・女性 29% (325 名)に対し、今年度は男性 62% (318 名)・女性 38% (194 名)と女性の参加が増えた。

その一因として、「何かできることはないか」と思いながらも、震災初期は個人宅の泥のかきだしやがれき撤去など力仕事が多いことから女性が参加を見合わせていくこともあるだろう。時間の経過とともに、活動内容に花壇づくり、農作業の支援なども加わり、参加しやすさが生まれたことが考えられる。

また口コミにより仲間が仲間を誘い参加する様子も見られるようになり、バツツアーという側面も加え、参加しやすさが増したと思われる。

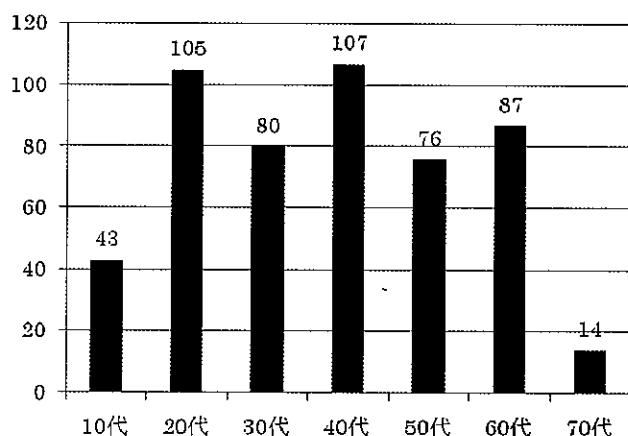
そして、被災地復興に向けて「継続した関わり」をしたいという参加者も多くみられ、全体参加者の 44%が複数回の参加者である。自分が見聞きしたことを地域や職場で伝えることはもとより、汗を流し、復興への歩みを見届けていきたい思いの表れでもあると思われる。



次に、年代別内訳を記す。

20 代、40 代の参加が同程度に多いことがわかる。そして、60 代、30 代と続く。これも前年度と対比すると、前年度は 20 代の参加がもっとも多く、30 代、40 代と続いていた。

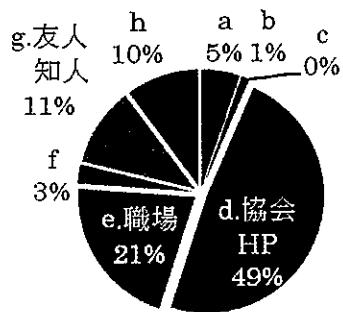
バス派遣は木曜の夜出発、金曜日～日曜日の 3 日間を現地で活動するという日程であったため、勤労者は有給休暇やボランティア休暇を取得しての参加という声も聞いた。



次に、活動を終えた参加者のアンケート結果を記す。

1. 今回のボランティア募集はどこで知りましたか？

- a 新聞
- b テレビ
- c ラジオ
- d 静岡県ボランティア協会ホームページ
- e 職場で
- f 社会福祉協議会で
- g 友人・知人から
- h その他

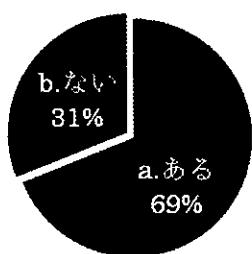


「協会のホームページを見て参加した」という方が半数を占めた。今、情報を得る手段としてインターネットは欠かせないが、新聞やテレビ等による報道が減る中で、インターネットは情報を受け取る側にとっても、発信する側にとっても有効なツールとなった。また、一度参加した方が現地のその後の様子を知りたいという思いを強くもち、ホームページのみならず現地スタッフからの東日本大震災被災地支援活動ブログを定期的、継続的に見て、ボランティアに参加している様子も見受けられた。

また、一度参加した参加者が同僚や知人・友人に声をかけ、一緒に参加する様子も見られた。現地の状況に不安を持つ初めての参加者にとって、宿泊拠点があること、また静岡からの往復バスがあることは、安心して参加できる後押しとなつたようだ。

2. これまでにボランティア活動をしたことがありますか？

- a ある
- b ない

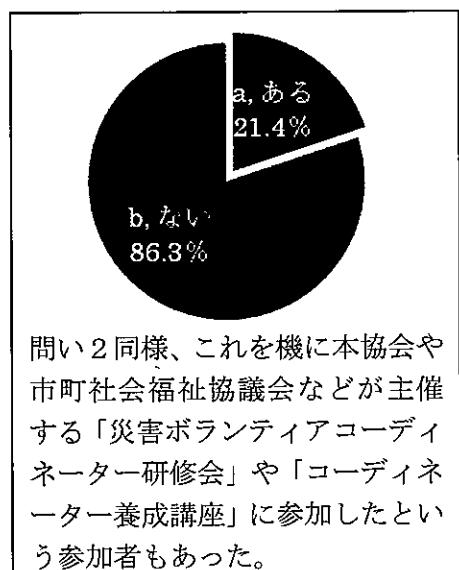


「ある」という回答が約7割をしめているが、日頃から地域でのボランティア活動に参加しているというよりは、平成23年度に災害ボランティア活動に参加したことのあるという複数回参加による「ある」が目立った。

しかしながら参加者に話を聞くと、地域で何かできることはないかと考え、これを機に地域の防災活動や様々なボランティア活動に参加するようになった参加者もある

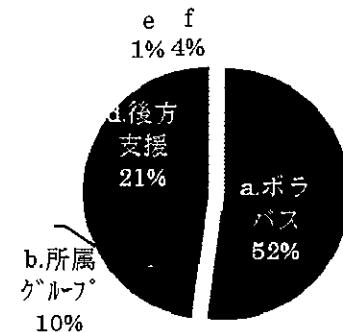
3. これまでに災害ボランティアに関する講座や訓練に参加したことがありますか？

- a ある
- b ない



## 5. 今後、どのようななかたちで支援活動に参加したいと思いますか？ (複数回答可)

- a 今回のようにNPOなどの団体が募集するボランティアに参加したい
- b 所属するボランティアグループなどの活動に参加したい
- c 個人で情報を集めて被災地で活動したい
- d 募金や情報提供などの後方支援活動を行いたい
- e 参加する予定はない
- f その他



静岡の団体がバスを出し、事前オリエンテーションをした上で参加するプログラムへの安心感が結果となったようと思われる。またNPOとして独自に募金を呼び掛けたり、助成金申請をする中で、参加しやすい参加費設定をしたこと、参加しやすさの一因となっていることが見受けられる。

また次に「後方支援活動に参加したい」という回答が多いが、これは自分が現地で見聞きしたことを自分でとどめてはいけないという思いの表れと考えられる。震災から時間が経過し、地元の方が作業とともに参加をしたり、ボランティアの活動を見て差し入れを持ち声をかけてくださるなど、地元の方と関わることも増えてきた。震災当時の様子をお話くださることもあり、お話や目に見える風景に、活動に参加したボランティアは復興への道のりが長いものであることを実感するとともに、わずかな滞在時間であっても、ボランティアの参加により少しずつ前に進む現状を目にし、一人の力が集まると大きな力になることを実感する。だからこそ、静岡に戻った今、できることを探したい、できることをしていきたい、と思うのであろう。

## 6. その他、ご意見・感想等がありましたらお聞かせ下さい

次に、自由記述欄にご記入いただいた内容をいくつかに分類して紹介したい。

ボランティアについての意識が変わったという声や、これからの中興に向けての思い、また長く東海地震が心配される本県に暮らす市民としてどう災害に備えるかなどそれぞれの思いが記された。

### 【ボランティアについて】

- ・今回参加させていただき、今まで考えていた「ボランティア」というものについて新しい考えができるようになった気がします。(E・女性)
- ・ボランティアって何かいろいろ考えさせたされました(G・男性)
- ・一人の力では大きなことはできませんが、人が集まれば大きな力になります。(T・女性)
- ・今回の経験は、もう一度東日本大震災について考える機会を私に与えてくれました。そして、私は活動を通して、楽しいという感覚を得ました。不謹慎かもしれません、ボランティア活動がただの自己犠牲や同情からくるものではなく、する側もしてもらう側も何かを得、つながりを大切にしていくためには、楽しさや達成感は必要なことの様に感じました。今回はここに書ききれない程、様々なことを感じ、経験させていただきました。(W・女性)

- ・ボランティア活動はいろんな方の協力があって成り立っているんだなと思いました。この3日間でボランティア活動をしたとはとても言えないと思いました。今後も必ず災害ボランティアに参加したいです。(T・女性)
- ・一つ、一つの作業が自分たちにとってはとても地味なものに感じたけれど、その一つ、一つが現地の人々の今、最も必要としている活動なのだと知り、ボランティアというものはサポートで、主役は現地の人々なのだということを再確認するとても良い機会になりました。(O・男性)
- ・今回のボラ活を通して、「笑顔」「コミュニケーション」「思いやり」の大切さを再認識することができた。(H・男性)

#### 【地元でできることを。できることを、できる形で】

- ・災害支援を通じ、地元の防災についてもっと考える必要があると思う(O・男性)
- ・次につながるにはどうしたらよいか、広報とまではいかなくても周りの人達に話を聞いてもらい、仲間を増やしたいと思いました(K・女性)
- ・現地に来ないと分からぬことがたくさんあるなと思いました。最終日には被災された方のお話を聞くことができ、自分の地域の防災にもつなげていかなければ感じました。(K・女性)
- ・東海地震の折には一緒に頑張りましょう(Y・男性)
- ・ささえる支援、風化させない為に活動した事や見た様は、伝え次ぎます。
- ・今後も、自分のできる事をできるだけやっていきたいと思います。(K・女性)
- ・現地に行って分かったこと、考えたこと、これをこれからどうやって周りに伝えていくかが大きな課題です。私達が伝えていかなくてはいけない事はたくさんあります。まずは、とにかく今は人の手が必要とされているということを発信していきたいです。(T・女性)
- ・私がボランティアに参加して役立てたかは分かりませんが、今後この感じた心が風化しないようまたボランティアに参加したいです。(H・女性)
- ・被災した方が「1番して欲しい事は、定住できる家[居場所]が欲しい事だ」とおっしゃっていたのが忘れられません。どの様な形で力になれるのか、模索したいです。(N・女性)
- ・住民にとってはまだまだ数年かかるであろう復興への遠い道のりを考えると、長期的に支援していきたいとあらためて思いました。(S・男性)
- ・安心できる環境の中で活動できました。自分にできることは何か、しっかりと考えてみたいと思います(I・男性)

#### 【後方支援への感謝】

- ・ボランティア協会の後方支援がなければ、私達、個人の活動は岩手という遠距離もあり、なかなか気軽に参加できません。個人では微力ですが、少しでも人数が集まれば、力を発揮します。(K・男性)
- ・我々が「何かしたい」と思い、こうして活動できるのも、静ボラ協、まごころ寮のスタッフ、まごころネットの皆様など、ボランティアしたい人をささえてくださる方々のおかげです。このような方々への感謝も忘れないように、これから支援活動を頑張っていきたい。(T・男性)

## 【感想】

- ・瓦礫に埋もれた住宅地跡の清掃は、一人では、どうにもならないだろうが、みんなでやれば綺麗にできた。あらためてチームワークの重要性を感じました。(A・男性)
- ・ボランティアが云々することではないが、復興とはほど遠い感じでした。(S・男性)
- ・ご縁があって、いろいろな人と会えて いろいろなお話を聞けて良かったです。(I・男性)
- ・皆さん一丸となり 3日間の活動があつという間に終わってしまいました。まだまだ出来る事がある事を痛感しました。(S・男性)
- ・全体的にボランティアが少なくなる傾向は当然ですが、まだまだ住民からの要望はあると考えます。他のボランティアが少人数で作業する、また多くの人数で対応できる事が必要だと思います。仮設住宅対応は、まだまだ必要と思います。(N・男性)
- ・日常に流されそうになります。でも、流されて忘れていくのは嫌です。これからも、日常とボランティアを離さず生活したいです。いつか日常と現地（現実離れした）のギャップが、これから差が少しずつせばまってほしいと思いました。場所がちがうだけのギャップ。(Y・女性)
- ・変わっていない風景の中での生活に頭が下がる思いです。(S・男性)
- ・もし自分が自分の身一つ以外なくなってしまったらと何度も考えました。どれほど辛いだとうと、想像つきません。微力でも自分に出来ることがあったことは嬉しく一人よりも二人、二人よりも三人・・・30人が集まる程、力が大きくなることを知りました！！沢山の優しさにも触れることが出来ました。(S・女性)
- ・皆の協力で、大きな成果が出せたと思います。1人1人はとても小さな物ですが、多勢が集まり協力し合って行う作業は、大きな力になるのだと思います。(S・男性)
- ・今回、何度目かの参加になる方も多く、やはり現地を見て現実を知る事で、一度きりで終わらせられないと思われるからではないかと感じました。地元では、イベントを被災地でやっている様子等ばかりがTVで流され、多くの人が“もうだいぶ復興が進んでいるのか”と思ってしまっている感じがします。自分が今回知った事実を多くの人に伝えていきたいと思います。(S・女性)
- ・活動内容が変わり、新しい街ができ始めていると感じましたが、まだまだ手つかずの所もあり、行政や所有者の気持ち等、大変なことが山のようにあるのかなあと思います。被災者さんにも支援の差があると聞き、どうにかならんのか・・・と切なくなります。(O・女性)
- ・現地を自分の目で見たことによって、マスコミで報道しているよりもまだやることが多くあり、復興というよりも復旧という段階だということを認識した。(Y・男性)
- ・まだまだ復興はこれから！！どんな形でも今後も関わっていきたい！！(T・男性)
- ・ボランティア（東日本大震災、静岡県災害ボランティア）という同じ志を持ったメンバーと共に寝起きし、作業出来た事は、自分にとって非常に有益なものであった。(K・男性)
- ・被災地のために、自分ができることは本当に小さなことですが、これからもボランティア等に参加し、自分ができることはちょっとずつでもやっていきたいと思いました。(T・男性)
- ・まだ復興は終わってないけど、被災された方の心も少しずついい方に向かっているのかなと思いました。(O・・男性)

### 第3章

東海地震等に備えて

—ボランティアの力を活かして  
地域の復旧・復興を進める—

---

東海地震等の大災害の発生が高い確率で予想されている静岡県に住む私たちは、東日本大震災を他人事とせず、まさに当事者という認識で捉えていく必要がある。静岡県ボランティア協会は、ボランティア活動についても独自の被災地支援体制で臨み、息の長い活動と、被災地の人たちを後方から支える活動を模索した。また、被災地での継続したボランティア活動を通して得られた多くの経験と教訓を知恵に変え、静岡県における災害時への備えに活かす取り組みとなるよう展開した。

### (1) 東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会

東日本大震災の被災地支援にあたっては、岩手県遠野市に構えたボランティアの活動拠点「遠野まごころ寮」が大きな力を発揮した。遠野まごころ寮は、日本財団 ROAD プロジェクトの一環で、日本財団・東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会・震災がつなぐ全国ネットワークの三者が合同で設置し、静岡、東京、神戸などから送り出すボランティアの宿泊拠点となった。

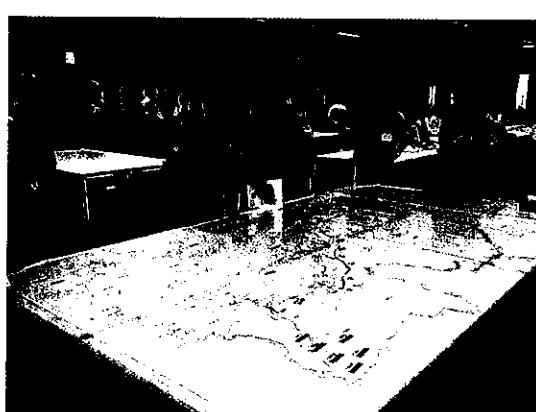
東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会（以下、ネットワーク委員会）は平成 20 年、県内外の災害ボランティア関係者が平常時から信頼関係を築き、被災地での救援活動を迅速に進めていくための広域受援体制づくりと広域支援体制のあり方を検討していくことを目的に、静岡県ボランティア協会が事務局となり設置したものである。

ネットワーク委員会ではこれまで、その具体的な取り組みとして「静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」（以下、図上訓練）を実施してきている。この図上訓練は、東海地震を例に大規模災害時の被災地支援体制やしくみを考えると共に、県内外の関係者が顔の見える関係をつくる場となってきたが、東日本大震災の現場には、災害ボランティア関係者だけでは解決できない多くの問題や課題があることが明らかとなった。本協会をはじめネットワーク委員会に関わる組織・団体は、こうした被災地支援を通して得たさまざまな学びを東海地震などの大規模災害時の備えに活かし、地域のレジリエンス（回復力）を高めることにつなげることを目指している。

なお、平成 22 年度には内閣府の要請を受け、ネットワーク委員会として政府総合防災訓練の一環で実施された災害現地対策本部設置・運営訓練に参加し、この実績が東日本大震災に際してメンバーが宮城県の被災者支援 4 者連絡会議に参加することにつながった。同訓練には平成 24 年度も参加している。



ネットワーク委員会(H25.1.29 第 5 回会議)



平成 24 年度災害現地対策本部設置・運営訓練  
(H24.8.30 静岡県庁)

## (2) 被災地支援活動と「受援力」

支援活動においては、被災地域の「受援力」と、内外の支援関係者が互いの特徴を活かして「連携」できることが大切だと考える。

災害時には被災地の外から多くのボランティアが駆けつけ、その力は今や地域の復旧・復興に欠かせないものとなっているが、自分たちが本当に求める支援を受けるためには、被災した地域の側に外部支援を受け入れる知恵やワザ＝“受援力”が必要だ。静岡から多くのボランティアが被災地に出向き、ボランティア活動を通じて現場を体感し、地元の人たちの声を直に聞いてきた経験は、翻って静岡が被災したときに自分自身や地域がどうなるのか、何が必要となるのかを真剣に考える上で大きな意味を持った。

被災地での経験は、その後、一人ひとりが自分の経験をまわりに伝え、あるいは新たな活動に取り組むことなどを通じて、改めて災害への備えを考え、また地域の受援力につながる一歩となっている。本協会開催の災害ボランティアコーディネート研修会（静岡県労働者福祉基金協会委託事業）をはじめ、それぞれの地元で災害ボランティアの講座などに参加している人も少なくない。

## (3) 図上訓練を通じた「連携・つながり」

受援力とともに「連携・つながり」をキーワードにした取り組みが図上訓練である。平成24年度のネットワーク委員会では、東日本大震災を踏まえて東海地震等の大規模災害に備えるために、さまざまな分野で被災地支援や地域の支援につながる活動を行っている県内外の若手関係者を中心に、図上訓練の企画ワーキンググループを設置した。

多様な団体・組織のメンバー57名から成る大所帯のワーキンググループが、役割分担と連携をしながら訓練の企画・運営を担つたこと自体が「平時からの関係をつくり、深める」図上訓練そのものであり、災害ボランティア活動の現場を体感するものだった。

さらに、図上訓練参加団体の活動分野も災害ボランティア関係にとどまらず多岐にわたり、東日本大震災の被災地で活動する地元団体の参加も得て、災害時に活かせる「顔の見える関係」づくりを大きく進める場となった。この図上訓練を通じて、次の災害に向けた地道な人間関係が具体的に広がってきてている。



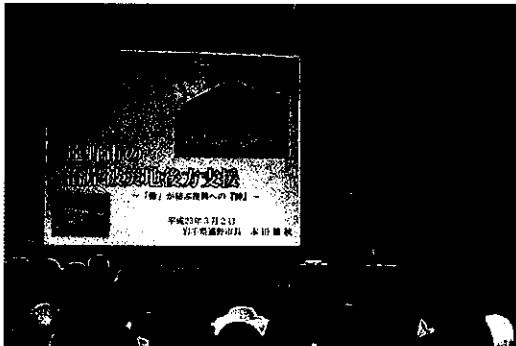
企画ワーキンググループ会議(担当ごとの検討)



企画ワーキンググループ会議(全体共有・検討)



第8回静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練（H25.3.2～3.3）



東日本大震災を経て、私たちは平時から地域内、地域外でのつながりを通じて地域のレジリエンス（回復力）を高めることの重要性を認識した。ネットワーク委員会は、次の災害に備えて東海地震と静岡県を事例にその具体化を考える場をつくり、東日本大震災被災地との関係を含めたさらなる関係性を広げることが、その大きな役割となっている。

#### 平成24年度 東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会

##### ①委員会の開催

- 第1回…6月19日(火) 静岡県総合社会福祉会館2階ボランティアピューロー
- 第2回…8月6日(月) ALWF ロッキーセンター3階第会議室
- 第3回…10月23日(火) ALWF ロッキーセンター3階第会議室
- 第4回…12月18日(火) ALWF ロッキーセンター3階第会議室
- 第5回…1月29日(火) ALWF ロッキーセンター3階第会議室
- 第6回…3月2日(土) ALWF ロッキーセンター3階第会議室

##### ②企画ワーキンググループ

- 設置準備会議…10月22日(月) 静岡県総合社会福祉会館2階ボランティアピューロー
- 県内説明会…11月29日(木) 静岡県総合社会福祉会館2階ボランティアピューロー
- 第1回…12月13日(木) ALWF ロッキーセンター3階第会議室
- 第2回…1月14日(月・祝)～15日(火)  
静岡県総合社会福祉会館2階ボランティアピューロー、他
- 第3回…2月20日(水) 静岡県総合社会福祉会館2階ボランティアピューロー

## **資料編**

- ・静岡県災害ボランティア派遣 派遣実績
- ・関連新聞記事

平成24年度(4月1日～3月15日)ボランティア活動者数

派遣期間	ボランティア			同行事務局			隊次など	活動場所	活動内容
	人数	男	女	人数	男	女			
4月9日～4月12日	1		1	0			あそびっこ	遠野市	あそびっこ
4月13日～4月16日	1		1	0			あそびっこ	遠野市	あそびっこ
4月16日～4月21日	1		1	0			あそびっこ	遠野市	あそびっこ
4月19日～4月23日	20	17	3	1		1	第1次隊 復興ボランティア 横山	釜石市、大槌町	宅地跡清掃、海産物加工、ガレキ撤去
4月20日～4月29日	1	1		0			第1次隊 仮設応援ボランティア	遠野市	あそびっこ
4月27日～5月6日	4	2	2	0			第2次隊 仮設応援ボランティア	遠野市	あそびっこ、足湯隊
5月4日～5月13日	2	2		1	1		第3次隊 仮設応援ボランティア	遠野市	あそびっこ
5月10日～5月14日	34	21	13	1		1	第2次隊 復興ボランティア 清水	釜石市、大槌町、陸前高田市	側溝清掃
5月11日～5月20日	5	1	4	1		1	第4次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	あそびっこ、足湯隊
5月18日～5月27日	1		1	0			第5次隊 仮設応援ボランティア	遠野市	あそびっこ
5月25日～6月3日	7	2	5	2		2	第6次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	あそびっこ、足湯隊
6月7日～6月11日	30	24	6	2	1	1	第3次隊 復興ボランティア 松永	大槌町	漁港清掃
6月14日～6月18日	4	1	3	0			第7次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	あそびっこ、足湯隊
6月21日～6月25日	3	1	2	0			第8次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
6月28日～7月2日	6	2	4	0			第9次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
7月5日～7月9日	5	2	3	0			第10次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
7月12日～7月16日	26	17	9	1		1	第4次隊 復興ボランティア 柚木	大槌町、釜石市、遠野市	宅地跡清掃、農園除草、イベント手伝い
7月12日～7月16日	6	2	4	0			第11次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
7月13日～7月15日	37	27	10	2	2		第1回花桃 神田理事長、小野田常務	遠野市運動公園、たかむろ水光園	花桃植栽 150本
7月19日～7月23日	6	3	3	0			第12次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
7月26日～7月30日	6	2	4	0			第13次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
8月2日～8月6日	5		5	0			第14次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
8月5日～8月9日	36	11	25	2	1	1	高校生企画 鳥羽局長 久保田	大槌町、釜石市	地元の方との交流、ガレキ撤去
8月9日～8月13日	26	19	7	1	1		第5次隊 復興ボランティア 大石	釜石市	三陸海の盆 準備、参加、片付け
8月9日～8月13日	6	3	3	0			第15次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
8月23日～8月27日	27	16	11	1		1	第6次隊 復興ボランティア 横山	大槌町、釜石市	花壇整備、ガレキ撤去
8月23日～8月27日	6	2	4	0			第16次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
8月30日～9月3日	5	3	2	0			第17次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
9月6日～9月10日	6	4	2	0			第18次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
9月13日～9月17日	28	19	9	1		1	第7次隊 復興ボランティア 久保田	釜石市、大槌町	ガレキ撤去、農園整備
9月14日～9月16日	49	29	20	2	1	1	第2回花桃 小野田常務、柚木	こすもす遊園、神ノ沢、常楽寺	花桃植栽 400本
9月20日～9月24日	4	3	1	0			第19次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
9月27日～10月1日	5	2	3	0			第20次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
10月4日～10月8日	5	3	2	0			第21次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
10月11日～10月15日	31	21	10	2	1	1	第8次隊 復興ボランティア 山本 横幕	大槌町、釜石市、遠野市	ガレキ撤去、農園整備、イベント手伝い
10月11日～10月15日	6	2	4	0			第22次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
10月25日～10月29日	28	19	9	1	1		第9次隊 復興ボランティア 鳥羽	大槌町、釜石市、遠野市	ガレキ撤去、農園整備、イベント手伝い
10月25日～10月29日	6	2	4	0			第23次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
11月1日～11月5日	4	0	4	0			第24次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
11月8日～11月12日	27	21	6	2	1	1	第10次隊 復興ボランティア 小幡、鳥羽	釜石市	ラベンダー畑整備、
11月8日～11月12日	4	1	3	0			第25次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
11月22日～11月26日	27	22	5	2	2		第11次隊 復興ボランティア 鷺山、鳥羽	釜石市、大槌町	クリスマス飾り付け、畠整備、花桃植栽地整備
11月22日～11月26日	4	2	2	0			第26次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
11月29日～12月3日	5	3	2	0			第27次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
12月6日～12月10日	19	16	3	1		1	第12次隊 復興ボランティア 横山	釜石市、大槌町	花桃植栽地整備、お茶っこ会
12月13日～12月17日	0	0	0	0			第28次隊 仮設応援ボランティア		参加者なし
12月21日～12月25日	28	20	8	2	1	1	第13次隊 復興ボランティア 大石、松永	釜石市、大船渡市、 株式会社山本、土浦町	サンタが100人やってきた！プロジェクト
12月21日～12月25日	4	1	3	0			第29次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
1月10日～1月14日	2	2		0			第30次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
1月24日～1月28日	5	1	4	0			第31次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
1月31日～2月4日	4	2	2	0			第32次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
2月7日～2月11日	5	3	2	0			第33次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
2月21日～2月25日	5	3	2	0			第34次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
2月28日～3月4日	4	1	3	0			第35次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	足湯、サポートセンター手伝い
3月7日～3月11日	5	2	3	0			第36次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市	サポートセンター手伝い、イベント準備手伝い
3月8日～3月12日	45	28	17	6	3	3	静岡つながり隊	遠野市、釜石市、大槌町	まごころ寮閉所式・キャンプレナイト準備、参加
	682	413	269	34	16	18			

## これまでの活動紹介

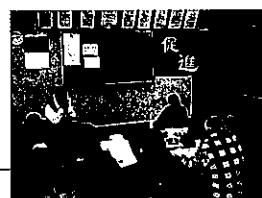
(現地での活動は、遠野まごころネットや現地コーディネーターの調整により行っています)

### 平成 23 年度

平成 23 年 4 月 7 日出発の第 1 次隊から平成 24 年 4 月 1 日帰着の第 46 次隊まで、のべ 1,160 名のボランティアを派遣してきました。活動場所は、陸前高田市・大槌町・釜石市で、ガレキ撤去や土砂のかき出し、ガラス片の回収のほか、支援物資の仕分けやイベントのお手伝いなどさまざまな活動で被災地の復興のお手伝いをしてきました。



11 月からは仮設住宅で生活する方々を支援するボランティア活動も開始し、遠野市・釜石市・大槌町などの仮設住宅を訪問し、足湯隊、お茶っこ隊活動で生活している方々が外に出るきっかけづくりや交流の場づくりのお手伝いをしてきました。



### 平成 24 年度

#### 第 1 次隊（4 月 19 日～23 日）

釜石市箱崎地区の宅地跡のガラス片回収活動

大槌町吉里吉里地区のワカメ加工のお手伝い

大槌町赤浜地区の宅地跡の清掃活動、

お祭り用提灯の飾り付けのお手伝い



参加者アンケートから 「活動を通じてどのようなことを考えましたか？感じましたか？」

- ・自分がテレビなどで見たものより想像以上のものでした。ガレキはほとんどかたづいていると思っていたが、まだたくさんのガレキが残っており一刻も早い復興を願っています。
- ・震災後 1 年経過し、様々な支援が必要とされていることがわかった。これからも継続して活動に参加していきたい。
- ・被災された方の何かの役に立ちたいと思って参加しましたが、それは自分の思い上がりだったと気付きました。活動を通じて現地を見て、現地の方を思いやる気持ちを日々忘れないことが、最も大切なかなと感じました。
- ・ガレキ処理作業は細かいガラス片などが多く、かなり根気がいる作業。また、油断すると怪我もしやすい。

## 第2次隊（5月10日～14日）

釜石市箱崎地区のガレキ撤去活動、花壇整備活動  
大槌町赤浜地区の側溝ドロかき出し活動、花壇整備活動  
大槌町吉里吉里地区の保育園建設予定地整備活動



## 第3次隊（6月7日～11日）

大槌町吉里吉里地区の漁港周辺のガレキ撤去活動、  
ガラス片回収・清掃活動



参加者アンケートから 「活動を通じてどのようなことを考えましたか？感じましたか？」

- ・被災地を実際に見ることで現地の方の苦労が伝わってきました。被災地の方の気持ちを尊重した支援の継続が必要だと思いました。
- ・まだまだやることがたくさんある。それを周りに広めたい。地元の方と一緒に作業ができるようになり嬉しくほっとする。
- ・震災が起こる前のように復興するには本当に長い時間がかかるものだと改めて感じた。その地域に住む方々に元気になってもらえるような活動、種まきや花壇作りも大切なだと感じた。
- ・3日間の活動で漁港はすいぶんときれいになりました。人手をかけられるボランティアだからこそこの成果だと思います。これからまだ必要な活動だと感じました。
- ・自分自身の体調をしっかり整えてから参加すること。現在できることを皆が行えばもっとガレキの撤去・復興が早まると思う。一人一人の力がまとまれば、大きな力になることを実感した。
- ・まったく会ったことのない人同士なのに、いろいろな作業が自発的に進んでいく。同じ志を持った人が集まった時の力は大きいとあらためて感動した。

#### 第4次隊（7月12日～16日）

- 大槌町第2まごころの郷の除草活動
- 大槌町赤浜地区の宅地跡の除草活動
- 大槌町小鎌地区の側溝ドロかき出し活動
- 釜石市鵜住居地区の宅地跡のガレキ撤去活動・除草活動
- 遠野市レクリエーション施設のイベントのお手伝い



#### 第5次隊（8月9日～13日）

- 釜石市鈴子地区「第2回三陸海の盆」開催準備、  
イベント参加、片付け



参加者アンケートから 「活動を通じてどのようなことを考えましたか？感じましたか？」

- 初めての参加でしたが、映像から流れていた3月11日の様子が思い出され、多くの方が犠牲になられたこの場所にいる自分の小ささをあらためて痛感しました。今後は多くの知人等に活動の意義を伝えていきます。
- 子供たちと1日一緒にいて、笑顔が見れてうれしかったです。
- 1年4ヶ月が経っても、まだまだ人手が必要だということを実感した。一方で、1人1人の少しずつの活動が確実に復興に向かっているということを感じることができた。
- 8月11日が月命日ということもあり、東北の方々と共に故人を思うことができた。震災を忘れずに後世へ伝えることもボランティアだし、どんなささやかなことも必要だと思う。
- 「復興の兆し」とか「だいぶ片付いた」という言葉はよく聞きますが、壊れた建物、剥き出しになつた住宅の基礎、そして仮設住宅がある以上、復興に向けた取り組みが必要と感じた。
- (遠野まごころネット副理事長)臼澤さんの話しを聞いて、被害の深刻さと現実の怖さ、生きることの大切さを知った。

## 第6次隊（8月23日～273日）

大槌町赤浜地区の宅地跡の花壇整備活動

釜石市鵜住居地区の宅地跡のガラス片回収活動



## 第7次隊（9月13日～17日）

釜石市鵜住居地区の宅地跡のガレキ撤去活動、

ガラス片回収活動

大槌町まごころ広場の花壇除草活動、堆肥づくり

大槌町吉里吉里地区の保育園建設予定地整備活動



参加者アンケートから 「活動を通じてどのようなことを考えましたか？感じましたか？」

- ・被災された方が作業を見た時に、嫌な気持ちにならないように、時間がかかるても丁寧に作業することが大事だと思う。
- ・地道な活動ですが、少しずつ前に進むためには必要なことだと感じました。
- ・花壇の草取りは、過去の県ボラ隊が種を播いたところ。リレーを感じた。
- ・現地にこないとわからないことはたくさんある。新聞やニュースなどでは伝える事のできないものがたくさんある。多くの人に支援に来てほしい。
- ・ボランティア活動も時と共にニーズに合わせて変化し、やることがまだまだあると感じました。
- ・募金などの後方支援はもちろん、機会があればこうした現場での支援をしていきたいです。
- ・今まで復興に向けての下準備のためにガレキ撤去・清掃をメインに行ってきましたが、少しずつ復興に向けて具体的に地域全体が動き始め、それをサポートする活動に移行してきている事を実感しました。

## 第8次隊（10月11日～15日）

釜石市鵜住居地区の宅地跡のガレキ撤去活動、除草活動  
大槌町ハーブの郷のコミュニティスペース作り活動  
大槌町吉里吉里地区の保育園建設予定地整備活動  
遠野市柏木平レクリエーション施設のイベント手伝い



## 第9次隊（10月25日～29日）

大槌町ハーブの郷の堆肥づくり活動  
大槌町吉里吉里地区の保育園建設予定地整備活動  
釜石市鵜住居地区の花桃植栽地の整備活動  
遠野市「まごころ収穫祭 2012」会場設営、運営補助  
遠野市柏木平レクリエーション施設のイベント手伝い



参加者アンケートから 「活動を通じてどのようなことを考えましたか？感じましたか？」

- ・できることは小さくとも、活動自体を繋いでいくことが大事だと感じた。また何度も自分が繰り返し参加することも必要だと思いました。
- ・震災に関する報道が少なくなりつつあるが、鵜住居地区の現状を自分の目で見て、まだまだ復興にはほど遠いと感じました。地元の方のお話を聞くこともできたので、今後自分の周囲に今回の体験を語っていきたいと思います。
- ・津波が来た場所に実際に行くと、1年半以上経ったけれど初心を忘れずに、またできることをやって行こうという気持ちになります。
- ・私に今できることは、帰ってからこの3日間の出来事（見たこと、聞いたこと、感じたこと）を伝えること。
- ・復旧だけでなく、復興のために今後もボランティアが必要だということを実感しました。

## 第10次隊（11月8日～12日）

釜石市箱崎地区のラベンダー畑づくり・整備活動

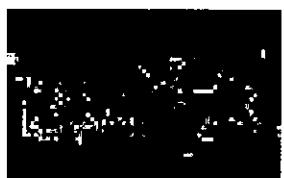


## 第11次隊（11月22日～26日）

大槌町「大槌町一番星☆プロジェクト」参加

釜石市箱崎地区のラベンダー畑の整備活動

釜石市鵜住居地区の花桃植栽地の整備活動



参加者アンケートから 「活動を通じてどのようなことを考えましたか？感じましたか？」

- ・地域の方が主体となって復興に向かって進みだしているのだと感じた。
- ・多くの人と一緒に、心を一つに行う作業は不思議なくらい気持ちの良いものでした。
- ・被災地の様子を見、話を聞くことで地震が現実感をもって伝わってきて、静岡での心がまえに大変役立つと思います。
- ・できることは小さな事ですが、忘れてませんよという気持ちを伝えたいです。
- ・3日間でできることの限界を感じたが、そんな少しのことでも次に人にバトンタッチして、一つの大きなことをするという“つながる”“つなげる”ことの大切さを知った。
- ・1年8ヶ月を経過し、思った以上にボランティアの内容は変わっているが、現地の復旧状況は進んでいない。
- ・私たちが何かをやるのではなく、寄り添っていることが被災地の方に対して復興の力になることを感じた。

## 第12次隊（12月6日～10日）

釜石市鵜住居地区の花桃植栽地の整備活動、花桃の越冬対策

大槌町公民館安渡分館のお茶っこ会参加



## 第13次隊（12月21日～25日）

「サンタが100人やってきた！プロジェクト

2012」に参加



参加者アンケートから 「活動を通じてどのようなことを考えましたか？感じましたか？」

- ・心のケアの重要性。現場に来てわかることの大切さ。大人の方々のプレゼントをもらった時の笑顔がよかったです。
- ・復興支援の形が今までとは変化しているが、まだまだ復興には時間が必要だと思いました。
- ・3日間活動を行い、この活動がみなさんの心のケアに役立つものだと感じました。
- ・ガレキの処理が終わってきてている事もあり、世間からあまり注目されなくなっている気がする。でも心の傷は容易には治らないと思う。長くともに支えあいたい。
- ・子供たちは無邪気でとてもかわいかった。たくさん笑わせてもらった。子供たちが“ありがとう”といってくれることがとても嬉しく思った。
- ・元気になってもらおうと意気込んで行ったが、逆に元気をもらった。
- ・東北の地域内のつながりの強さを感じた。

## 仮設住宅応援ボランティア第1次隊～第36次隊（4月19日～H25年3月11日）

仮設住宅に暮らす方々を応援するため、居場所づくり・つながりづくりを目的とした活動を行っています。

### しづおか足湯隊

仮設住宅の談話室や集会所を利用して足湯を提供しています。

湯に足をつけリラックスしていただき、お話を聴きます。

また、お茶を飲みながらお話をしたり、交流するための場を作っています。



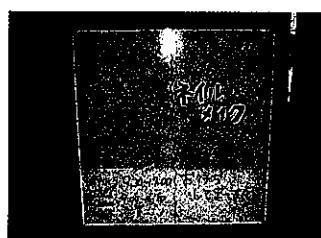
### これまでの活動場所

遠野市（雇用促進住宅、遠野仮設住宅）

釜石市（鈴子、甲子、白浜など約20か所）

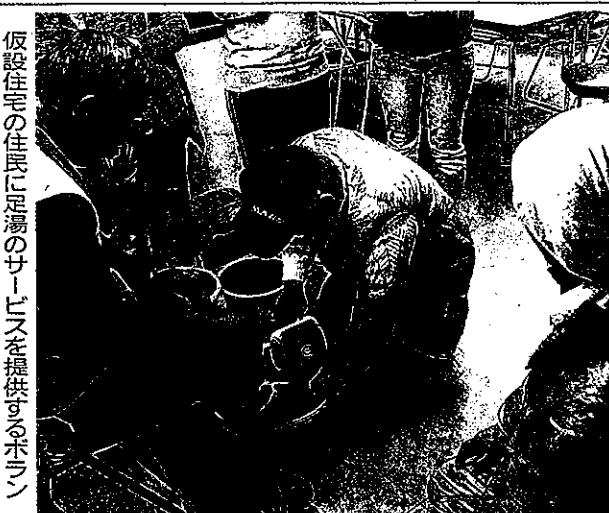
### 仮設住宅サポートセンターボランティア

遠野仮設住宅の集会所で子どもたちの子守、遊び相手をしながら、小さなお子さんを抱えるお母さんのお手伝いやサポートセンターのスタッフのお手伝いをしてきました。時には、特技を生かしたイベントを行ったりもしています。



### 参加者の活動記録から

- ・集会場でのお茶っ子隊。室内ということもあり、多くの人が集まって賑わった。ここでの会話で、近所の住民の安否を確認することもある。大切な役割を持つ場であることを再確認した。
- ・被災された方々と一緒にになって、心の痛みを共有しながら生きる希望、生き甲斐を見い出していくことを目的とした。
- ・一人暮らしのお年寄りは仮設住宅のなかでも孤立してしまっている・・・という印象を受けた。最初は口数少なく、表情も無表情に近かったが、時間をかけてゆっくりお話しする中で少しずつ心を開いてくれたと感じたことがあったため、お茶っ子隊や生活支援隊等ボランティアが間に入って住民同士の交流の橋渡しやきっかけづくりにこれからもなっていかなくてはと思った。



仮設住宅の住民に足湯のサービスを提供するボランティア

県ボランティア協会は2012年度も、東日本大震災で被災した岩手県へのボランティア派遣を継続する。がれき撤去などハード面

支援にも力を入れる。同協会は昨年4月8日に岩手県遠野市に災害ボランティア拠点を設置した後、38回にわたり大型バスで「被災地復興ボランティア」を派遣し、がれき撤去

までの復興支援に加え、足湯や子守のサービスなど、現地でニーズが高まっているソフト面の支援にも力を入れる。同協会は昨年4月8日に岩手県遠野市に災害ボランティア拠点を設置した後、38回にわたり大型バスで「被災地復興ボランティア」を派遣し、がれき撤去

186人が活動した。4月以降は、「被災地復興」「仮設住宅応援」各ボランティアを並行して派遣する。

5日間の「被災地復興ボランティア」は、津波被害を受けた土地での農作業の手伝いを

10日間の「仮設住宅応援ボランティア」は、集会所で足湯を施す「しづおか足湯隊」、子どもとの子守や遊び相手をする「あそびっこ」などの活動を定着させ、被災者の憩いの場づくりを目指す。

同協会は4~6月派遣分の参加を受け付けている。問い合わせは県ボランティア協会

（電054）020-717-717104

## 足湯、子守…被災者に憩いを

# ボランティア派遣継続

県協会

活動に加え、バス派遣のペースは現地の仕事量に合わせて昨年度の週1回から月1回に減らす。

10日間の「仮設住宅応援ボランティア」は、集会所で足湯を施す「しづおか足湯隊」、子どもとの子守や遊び相手をする「あそびっこ」などの活動を定着させ、被災者の憩いの場づくりを目指す。

同協会は4~6月派遣分の参加を受け付け

# 社説

&lt;2012.4.18&gt;

## ボランティア派遣

### 被災事情踏まえ継続を

静岡県ボランティア協会は本年度も東日本大震災で被災した岩手県にボランティアを派遣する事業を継続する。震災から1年以上たつても被災地では、まだまだ人の力が求められている。被災者の要望も変化してきている。今後も被災地の実情を踏まえた支援が必要だ。

昨年4月上旬、岩手県遠野市に活動拠点として飲食や宿泊ができるプレハブ2階建ての「遠野まごころ寮」を開設した後、週1回のペースでバスを運行し、現地に延べ1200人近いボランティアを送った。屋外作業が困難になる冬場を迎えるまで、参加者はがれきの撤去や家屋の片付けに当たった。全国の自治体が次々に被災地のがれき受け入れに手を挙げているが、山積みされたがれきは復旧・復興の妨げに

なっている。がれきの片付けはまだ終わるわけではない。

同協会は、冬場に中断していたがれき処理のボランティア派遣を再開する。月1回と派遣の回数は減るが、がれき処理の場を主に農地に絞る。さらに農作業も手伝う。

重機が入ってがれきをかき集めるところができる宅地や道路、港湾とは異なり、農地には手つかずのがれきが多く残っている。取り除くには人海戦術に頼らざるを得ない。土を掘り起こして、がれきを探し、一つ一つ除去していく。農業を再び始めたいと考えている被災者は力強い援軍になるはずだ。

昨秋から始めた仮設住宅の住民を支援するボランティアの派遣も継続する。滞在は10日間で、外出の付き添い、話しこそなどの活動に加えて、集会場で足湯を施すサービスも始める。

被災者がボランティアと向かい合つて、たらいの湯に足をつければ、心身ともリラックスして本音を漏らすはずだ。本当は何を求めているのか、どのような手助けが必要なのか。生の声に耳を傾け、今後の支援の在り方の参考にしてほしい。

県内のさまざまなもの団体、NPO法人がそれぞれの被災地とのつながりを基に支援を続けている。個人的に活動している人も目立つ。ただ被災地で活動する場合は費用がかかり、回数も限られている。

まとまりた数のボランティアを継続して派遣するために開設された遠野まごころ寮の運営も厳しい。運営を支える県内の企業・団体からの協賛金・個人の寄付金が減少しているからだ。

現地で活動する災害ボランティアを絶やさないためには、多くの県民の善意が欠かせない。ボランティア休暇制度の継続、導入など企業・団体の後押しも求めたい。



## 復興の象徴ハナモモ

静岡のボアラ  
ンティイアラ  
遠野に苗木を植樹

遠野市に拠点を置く静岡県ボランティア協会（神田均理事長）が、被災地支援を続け

メンバーは計120人が参加。同市綾織町の遠野運動公園と同市土淵町のたかむろ水光園の2カ所に、ハナモモの苗木を植えた。

なごは14日、「共に復興へと歩む糸の象徴」として同市にハナモモ150本を植樹した。

静岡県のボランティアと遠野市民がハナモモの苗木を植え、復興へ共に歩む絆を再確認した植樹会

のよう」「若手との交流を同士の交流を続けていきたい」と願いを込め、神田理事長は「美しい絆の花を咲かせてほしい」と期待した。

本5000本を提供。今後は被災地での植樹も計画している。

同市綾織町の遠野運動公園と同市上淵町のたかむろ水光園の2カ所に、ハナモモの苗木を植えた。

日時点での参加者は  
べ1651人。



ハナモモの苗木を植える参加者

14日前 岩手県遠野市

被災地にハナモモを贈る活動は、浜松市中区のバラ園「ばらの都苑」の天野和華苑主が同協会に苗木500本を提供を持ち掛けたのがきっかけ。同協会が募集中のハナモモのオーナー制度に同本部が申し込み、計250本を取りかかった。

「小さな親切」運動県本部（伊藤誠哉代表）は14日、東日本大震災で被災した岩手県遠野市でハナモモを植樹した。花を通じて被災者に癒やしを届け、復興支援で生まれた「遠野市との絆」のシンボルにしようと、両団体の関係者が作業に汗を流した。

のオーナーになった。

14日早朝に現地入り

した一行は、地元市民から温かい歓迎を受けた。伊藤代表、神田理事長、小川英雄県危機管理監による記念植樹に

# 遠野でハナモモ植樹

「小さな親切」運動県本部など

復興支援で交流

「小さな親切」運動県本部（伊藤誠哉代

被災直後に自衛隊のキャンプ地になつた遠野運動公園と、被災者に風呂を開放した宿泊施設「たかむろ水光園」の2カ所に計150本を植えた。島田市のガールスカウト県第17団や現地のボランティアも加わって、高さ1メートル(25)は「震災からだいぶたつてしまつたが、今だからこそ落ち着いてやる」と話した。

ほどの苗木を丁寧に植えた。

同本部の会員企業から参加した西田れいさん(25)は「震災からだいぶたつてしまつたが、今だからこそ落ち着いて被災地と向き合つことができた」と話した。

「小さな親切」運動県本部（伊藤誠哉代表）の三十九人とガールズカウト県本部第17団（島田市、牧田幸恵委員長）の三十六人が、東日本大震災で被災した岩手県遠野市を訪れ、花桃の苗木を植樹した。（小寺勝美）

遠野市

機に、また復興支援に  
参加したい」などと話  
していた。

十二日夜に出発した

両団体は十四日、静岡県が被災地支援の拠点としている遠野市の遠野運動公園で合流。一ヶ月ほどの成長した苗木五十本を植え

「」のほか「小さな親切」県本部のメンバーは、市内の「たかむろ水光園」にも百本を植樹。両団体は三陸海岸沿いの津波被災地を視

本田敏秋・遠野市長  
は「花桃には癒やしや  
思いやり、優しさがこ  
もつていて。静岡県民の  
支援への思いは被災地の  
一人一人の胸に刻  
まれている」と感激。  
参加者は「少しでも役  
に立ちたい」「これを

# 復興支援 痊やしの花桃



#### 「小さな親切」運動県本部など

野和幸さんが県ボランティア協会に提供。協会が一本一千円でオークションで募ったところ、「小さな親切」県本部が名乗りを上げ、ガールスカウトも植樹に参加することになつた。

白、ピンクと二色花が咲く桃花を贈ろうと思つた。被災地に根づいた。「ほい」と天野さん。伊藤代表は一潤いと元気を差し上げられたらしい。両県の絆が一層深まる「ことを祈る」と話した。

岩手で苗木150本植樹



（上）花桃の植樹に参加した人たち　（左）苗木を植える（左から）本田敏秋遠野市長、神田均県ボランティア協会理事長、伊藤誠哉「小さな親切」運動県本部代表、小川英雄県危機管理監=いずれも遠野運動公園で

## 被災者自線で活動を

岡 静

岩手派遣へ高校生が事前研修  
県ボランティア協会  
が東日本大震災の被災地へ派遣している災害ボランティアとして岩手県に向かう高校生が

2日、静岡市葵区で開かれた事前研修会に参加し、現地で活動する心構えを学んだ。

同協会のスタッフは「被災された方の自線で考え、自分の判断を押しつけないで」と呼び掛けた。「ふとした一言が相手の心を温かくする」とも傷つけることもある。「うみ」に見えても被災者にとっては『家財』です」などと被災者への配慮の大切さを強調した。

研修会に臨んだ県内各地の高校1~3年生30人は5日かかる研修会に臨んだ。岩手県大槌町や釜石市を訪れ、被災地の高校生たちと交流したり、がれきの撤去などに取り組む。県立富士宮北高3年の中川優芽さん(17)は「被災地の現状をしつかり目に焼き付けてたい」と話した。

生や仮設住宅に住む人たちと交流したり、がれきの撤去などに取り組む。県立富士宮北高3年の中川優芽さん(17)は「被災地の現状をしつかり目に焼き付けてたい」と話した。

平成24年8月3日 中日新聞

## 「和」を記し被災地へ

県内高校生 事前研修で製作

東日本大震災で被災した岩手県で五日からボランティア活動する県内の高校生の事前研修会が一日、静岡市葵区の県総合社会福祉会館であり、地元の住民に贈るメッセージボードを作った。

メッセージボードをつくる高校生=静岡市葵区で静岡県ボランティア協会が主催し、二十六校の三千人が参加。五日には静岡市をバスで出発し、六九日に陸前高田市、大槌町を訪れる。現地で「すづぶく」と呼ばれるあんかけごはんを被災地の人たちと一緒に作ったり、仮設住宅のお年寄りと触れ合ったりする。

メッセージボードは絵の具やクレヨンを使い模造紙に大小さまざまな花火を描いた。ボードを見て心を和ませてほしいと、紙の中心に「和」と記した。大槌町の住民に手渡す。宮城県気仙沼市出身で、富士市の高校生畠山ありさん(23)は「古里の役に立ちたい」と話していた。(天田優里)

## 被災者、お国言葉で交流

福島県を離れ、静岡で避難生活を送る被災者の心の交流や助け合いを目的とした「お茶っこ交流会」が、月一回のペースで県総合社会福祉会館（静岡市葵区）で開かれている。十七日に第四回の交流会があり、被災者たちがお国言葉で近況を話し合つ傍らで、ボランティアの大学生が親子で訪れた小学生に宿題を教えたり、一緒にゲームを楽しむ光景が見られた。

（深世古駿一）



被災者のネットワークリングや支援に取り組む福島県富岡町の市民団体「とみおか子ども未来ネットワーク静岡支部」が五月から始めた。同町から伊東市に避難する代表の宮本秀範さん（三〇）が中心となり、県ボランティア協会の支援のもと、静岡に避難する被災者同士の結び付きを強めようと企画し

「一人暮らし、ありがたい」  
次回は十月十四日に開く。問い合わせは宮本さん＝電090（6685）3193。総合社会福祉会館で。

た。

この日は被災者七人が参加。宮本さんや協会の関係者を交えながら、お茶を飲みながら避難先での生活や故郷の現状を語り合った。

福島県南相馬市から静岡市駿河区に避難する遠藤恵美子さん（七〇）は「一人で暮らしているので、被災者同士で話しあわせ」とほほどんどあります。こういう機会があることはありがたい」と笑顔を見せた。

宮本さんは「被災者にはいろんな悩みや不安がある。地元の言葉で気楽に話してもうことで、帰りには笑顔になる人もいます。多くの人に参加してほしい」と呼びかけている。



達成感あふれる笑顔をカメラに向け記念写真  
＝鵜住居町常楽寺



「緑のシンボル性」とハナモモの苗木を植える  
参加者＝鵜住居町神の沢地区

## ハナモモ400木を植樹 静岡のボランティア 釜石市内3カ所に

遠野市に拠点を置いて被災地支援を行つておられる静岡県ボランティア協会(糸田均理事長)などは15日、震災を忘れない被災地どつないがつていくシンボルにしてしまうと、釜石市にハナモモ400本を植樹した。同協会が定期的に運行するボランティアバスで訪れた「小さな親切」運動静岡県本部伊藤誠哉代表のメイティアら5人が参加。釜石市民も加わり、甲子町洞泉のこすもす農園、鵜住居町神の沢地区に市有地、常楽寺の3カ所にハナモモの苗木を植えた。

ANR上行(音橋辰彦)PO法人三陸産業復興支援ASSTO-SI S昇理事長(69)が企画し、浜松市の「ばらの都苑(天野和幸苑主)が苗木を提供。鵜住居町地区震災復興土地区画整理を考える会(古川愛明会長)と鵜住居を新生する会(竹端精己代表)が現地での調整などを行った。旧釜石北高があつたところと、元気になれるはきれいだと感じた。

この市有地、常楽寺の3カ所にハナモモの苗木を植樹。参加者は、高さ1.5メートルの木を丁寧に植え、じっくり根を張つて水をかけた。静岡市の横山君枝さんは、「思ひだけなく行動に移してみよう」と参加できるところで役立てば」と述べた。

神の沢地区には、200本を植樹。参加者は、高さ1.5メートルの木を丁寧に植え、じっくり根を張つて水をかけた。静岡市の横山君枝さんは、「思ひだけなく行動に移してみよう」と参加できるところで役立てば」と述べた。

「育てほしい」と願って植樹した。ハナモモは花を楽しむための桃で、サクラの開花前に咲き乱れる。「成長が早く、赤、白、ピンク3色の花が咲く。かわいらしい花が咲く。被災地の元気、交流に役立つよう根づいてほしい」と津波で流された小柳さん。同協会の天野さんは、「釜石と静岡の結びつきが深まることう」と話した。

# 岩手のヒマワリ 静岡で咲かそう



メッセージカードの入った袋にヒマワリの種を詰める生徒＝静岡市葵区

東日本大震災の被災地から届いたヒマワリの種を県内で育てる「おひつじ」静岡大成高（静岡市葵区）ボランティア部の生徒が、同市葵区の県ボランティア協会で配布の準備を進めていた。8000ヶ用意し、同協会が希望者に配布する。

## 静岡大成高生 種配布へ準備

種は岩手県陸前高田市下矢作地区の市民団体「たねつしまくべえ」が、地元の水田に咲かせたヒマワリから採つた。10月、被災地の後方支援にあたるNPO法人「遠野まじこふね」のスタッフが同協会に配布を持ちかけ、約2キロの種の提供につなげた。生徒は袋にスプーン1杯分の種と種が届いたときさつをまとめた名刺大のメッセージカードを入れた。部長で2年の古沢美佑紀さん（17）は「咲いたヒマワリを見た人が被災地のことを思い出しつづいてほしい」といふ。明るい気持ちになれば」、3年の米森ららさん（17）は「受け取ったヒマワリがこちらでも咲けば、被災地の人も喜ぶと思う」と期待を込めた。

種は岩手県陸前高田市下矢作地区の市民団体「たねつしまくべえ」が、地元の水田に咲かせたヒマワリから採つた。10月、被災地の後方支援にあたるNPO法人「遠野まじこふね」のメッセージカード

## 被災地贈答用のミカンを募集中

県ボランティア協会は東日本大震災の被災地に贈るミカンを募集している。「ミカンなら子供からお年寄りまで親しめる。今も仮設住宅で暮らす人にミカンを贈り、少しでも笑顔になってほしい」と話している。

ミカンは昨年12月も募集し約1000箱が集まった。同協会は岩手県大船渡市などの仮設住宅で配った。「大変強く励ました」と感謝の手紙が来るなど喜ばれたという。今年も岩手県内の仮設住宅に配る予定。

同協会は17日までに連絡し、19、20日のいずれかの日にミカンが到着するよう発送、また持参する。ミカンを贈るための募金も呼びかけている。問い合わせは同協会(054-2155-7357)。

【平塚雄太】

## 岩手にミカン贈ろう

### 県ボラ協が呼び掛け

県ボランティア協会は、東日本大震災被災地の仮設住宅で暮らす人たちに贈るミカンの提供を、県内の個人や団体などに呼び掛けています。19、20両日に静岡市葵区の同協会で箱単位で受け付け、21日に岩手県へ発送する。

ミカンを贈る活動は2011年末に続いて企画した。岩手県内で支援活動に当たるNPOメンバーらが被災者に届ける。送料に充てて募っている。「応援裏金」も併せて募っている。

前回は計32件、約千箱のミカンが寄せられました。同協会の担当者は「多くの人に静岡のイメージを抱いてもらえた。支援をきっかけにできたりながら大事にしていきたい」と話す。



被災者に届けられた静岡県産のミカン=2011年12月、岩手県内(静岡県ボランティア協会提供)

提供する場合は15日までに数量を同協会に知らせ、19日か20日に到着するように送る。

送り先は〒420-0856 静岡市葵区駿府町1の70、県総合社会福祉会館2階、県ボランティア協会。

問い合わせは同協会へ電話054(255)7335

7335

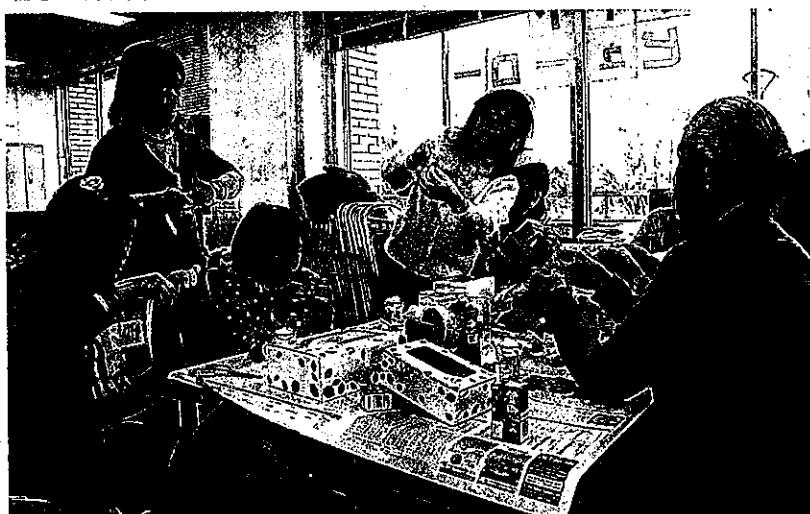
7335

7335

# 福島の避難者がXマス

## 葵区 子どもたちと交流会

静岡県内のボランティアと飾りを作る避難者ら=静岡市葵区の県総合社会福祉会館



東京電力福島第1原発事故を受けて福島県から静岡県に避難している親子が集つ「お茶っこ交流会クリスマス会」が16日、静岡市葵区の県総合社会福祉会館で開かれた。

## 「2年ぶり」広がる笑顔

福島県富岡町からの避難者でつくるごみおか子ども未来ネットワーク静岡支部の主催。約15人の避難者と静岡

県内の子どもやボラン

ティアら合わせて約40

人が参加した。同支部

の宮本秀範代表(38)と

ボランティアがサンタ

クロースに扮(ふん)

して会場を盛り上げ

た。松ぼっくりのツリ

ーやプリザーブドフラ

ワーの飾りを作るコー

ナーにもぎわった。

今年3月に島田市に

避難した同市立六合中3年波田野真衣さん(14)は「震災後は地域

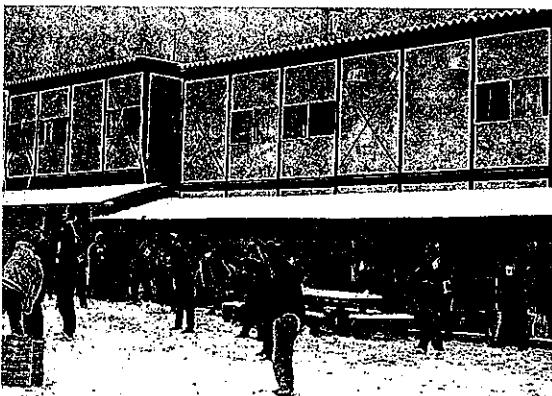
のイベントが中止され、出掛ける機会も減った。クリスマスカードを味わうのは2年ぶり」と喜んだ。宮本代表は「子どもたちの楽しそうな姿を見るのはうれしい」と目を細めた。

同支部は5月から月1回程度、被災地から避難者を対象に静岡市内で「お茶っこ交流会」を開いている。

東日本大震災の被災地支援を続ける県ボランティア協会は、岩手県遠野市の災害ボランティア宿泊拠点「遠野まごころ寮」(遠野まごころ寮)を閉所し、4月に同県沿岸部の釜石市と大槌町に移設することを決めた。震災後2年を機に、津波被害が大きかつた地域に拠点を移して復興支援を継続する。

遠野まごころ寮は震災直後の2011年4月、遠野市浄化センター敷地内に開設した。大津波に見舞われた釜石市、大槌町、陸前高

## 拠点遠野→釜石・大槌へ 沿岸部に移設し活動継続



災害ボランティアの宿泊拠点となっている「遠野まごころ寮」=2012年12月、岩手県遠野市(静岡県ボランティア協会提供)

田市などを支援するボランティアの拠点とした。プレハブ造り2階建てで約70人が一度に宿泊でき、静岡県内から訪れたボランティアなど延べ約3500人が利用した。開設2年で建物のり一ス期間が切れるのに合わせ、同協会は3月中旬までに閉所する」とを決めた。約150万円をかけて、建物2棟を買い取った上で、釜石市と大槌町に1棟ずつ移設することにした。

移設先では、これまで同様にボランティアの活動拠点とするほか、仮設住宅で暮らす被災者と協力しながら施設を運営する予定。同協会の小野田金宏常務理事は「復興に向けて、これからの方がエネルギーがいる。被災地の希望を受け止め、これまで以上に顔の見える関係づくりをしたい」と話している。

遠野まごころ寮は震災直後の2011年4月、遠野市浄化センター敷地内に開設した。

釜石市、大槌町、陸前高

### 震災復興支援の県ボランティア協会



閉所式であいさつする神田理事長  
—9日午後、遠野市内

県ボランティア協会  
が東日本大震災の被災地支援のために岩手県  
遠野市に開設し、災害ボランティアの宿泊拠点となっていた施設が  
9日、閉所した。今後は建物を岩手県釜石市と大槌町に移し、沿岸部の復興支援の拠点とする。

宿泊拠点施設「遠野まごころ寮」は2011年4月の開設から今年1月末までに、本県

## 「遠野まごころ寮」閉所

県ボラ協活動振り返り感謝

からボランティアが延べ3500人宿泊し、被災地支援活動に当たった。現地で閉所式が行われ、本県関係者と、遠野市長や地元ボランティア団体などがこれまでの活動を振り返り、感謝の意を伝え合った。

本県からは同協会の神田均理事長や森山誠二副理事、ボランティア50人が出席した。神田理事長は「遠野市が真っ先に支援を受け入れてくれたことは心強い限りだった。施設設置後も継続して支援していただきたい」と語った。

県ボランティア協会が東日本大震災の被災地支援のために岩手県遠野市に開設し、災害ボランティアの宿泊拠点となっていた施設が9日、閉所した。今後は建物を岩手県釜石市と大槌町に移し、沿岸部の復興支援の拠点とする。

宿泊拠点施設「遠野まごころ寮」は2011年4月の開設から今年1月末までに、本県

## まごころ寮は「三陸ふじのくに絆ハウス」へ

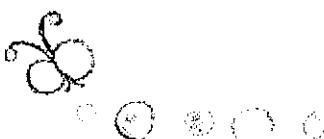
私たちが活動の拠点としてきた「遠野まごころ寮」は震災直後より2年にわたり、3,541名が活動に参加し、個人宅の泥のかきだしやがれき撤去、花壇づくりなどを行ってきました。また時間の経過とともに活動内容が変わるもの中で、仮設住宅応援ボランティアは足湯活動をとおして被災された方のつぶやきを聞き、たくさんの思いに寄り添ってきました。

多くの思いを見届けてきたこのまごころ寮は、今後、地元の方の声に応え「三陸ふじのくに絆ハウス（大槌・鶴住居）」として大槌町、釜石市で交流スペースとして活用いただくことになりました。地元に暮らす方々からは「みんなで話し合える場所がほしい」「伝統芸能の練習場として活用したい」「そこにいけば誰かいる場所にしたい」など、復興に向けて様々な活用したいという思いが話されています。

今後、建物の移設等に伴う費用をはじめ、中長期的に地元の方に活用いただくためには活動経費がかかります。復興に向けて未来を描くために、ぜひ皆さまのご支援をお願いいたします。

復興に向けたまちづくりは簡単には進みません。復興計画がつくられ、災害に強いまちを目指した取り組みはこれからが本番ともいえます。また、私たちも静岡から防災を学ぶ場として、地元の方との交流の場として、この施設を活用していきます。

震災を風化させることがないよう、今後とも皆様のお見守り、ご協力を  
お願い申し上げます。



「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」  
－東日本大震災被災地支援活動 静岡県災害ボランティア 活動記録－

発 行 平成25年3月

編集・発行 特定非営利活動法人静岡県ボランティア協会

〒420-0856 静岡市葵区駿府町1番70号 静岡県総合社会福祉会館2階

Tel.054-255-7357 Fax.0545-254-5208

E-Mail evolnt@mail.chabashira.co.jp URL <http://www.chabashira.co.jp/~evolnt>

印 刷 大日紙業株式会社